詐欺師たちの空

伊藤貴晴　作

【登場人物】

男１

男２

男１が柵に寄りかかってぼんやりしている。男２、登場。

男２ あれ？　おお、元気か

男１ え？

男２ 久しぶりだな、オイ。何やってんだよ、こんなとこで

男１ あ、あの

男２ 何だよ、しばらく見ないうちにスーツなんか着ちゃって。カッコいいね

男１ あー！　男２か

男２ え？

男１ ごめんごめん、久しぶりだから全然分かんなかった

男２ え、あ、あの

男１ 何してんの？　こんなとこで。スーツなんか着てたら誰だか分かんないな

男２ あの、ちょっと待って下さい

男１ ん？

間。

男２ 男１？

男１ そうだよ？

男２ あー

男１ 何？

男２ ごめん、全然気付かなかった

男１ は？

男２ ああ、そっか。スーツ着てると誰だか分かんないな。おお、久しぶり

男１ ちょっと待て。どういうつもりで話しかけたの？

男２ いや、別に。普通の知らない人だと思って

男１ は？　どゆこと？

男２ あ、ごめん。俺、今さ、オレオレ詐欺やってんだ

男１ 詐欺か

男２ まさか知り合いだと思わなかった。あーびっくりした

男１ こっちがびっくりだ

男２ やっぱ地元はダメだな

男１ どこだってダメだ。何やってんだお前

男２ 流行ってたろ、オレオレ詐欺。俺もやってみようと思ってさ

男１ いや、やるなよ

男２ 流行には乗り遅れないようにしないと

男１ ダメだろ。詐欺だろ

男２ かわいいもんだよ。そうだ、お前にも教えてやろうか

男１ いらないよ

男２ まあ聞けよ。三分で壱万円ゲットする方法

男１ 壱万円？

男２ まずは、さも知り合いかのように話しかけるんだ。馴れ馴れしくな。久しぶりに会ったことを強調しつつ、相手の名前も聞かないし、こっちも名乗らない

男１ それってよく電話であるやつだろ？

男２ 電話で振り込んでくれってのは確実性がない。確かにでかい額がいただけるが、時間もかかる。その場でいただく方が手っ取り早いんだよ

男１ でも会ったらばれるんじゃないの？

男２ そこがミソだ。お前、高校の同級生みんな覚えてるか？　何年も会ってなきゃ顔だって変わってるかもしれないし。さっきも言ったろ？　スーツなんか着てたら誰だか分からないもんなんだよ

男１ ああ、そうか

男２ そこでズバリ、狙いは若いサラリーマンだ。学生は金持ってない。でも社会人なら財布の中に福沢諭吉の一人や二人いるだろ。そこでこうだ。今は営業で出てるけど、すぐに会社に戻らなきゃならなくなった。ところがさっき財布を落としちまった。タクシーで戻らなきゃ間に合わない。でなきゃクビだ。頼む、タクシー代だけ貸してくれ

男１ それで壱万円も出すか？

男２ タクシーなんかいくらかかるか分からない。ちょっと乗れば二、三千円するからな。五千円あれば足りるだろうと思うが、人には見栄ってもんがある。気前良く財布からすっと福沢諭吉が出てくる。ピンク色のな。後はひたすら礼を言って走って逃げればいい

男１ はあ、なるほどね

男２ どうだ、簡単だろ？

男１ 相手に手持ちがなかったらどうするんだよ？

男２ その時は諦めるさ。銀行で下ろすって言われても断る。警察呼ばれるかもしれないしな。とにかくやばいと思ったら逃げる。急いでるって言ってるんだから別に違和感はない

男１ お前は何と言うか、相変わらずだな

男２ 何が？

男１ 昔から詐欺っぽい所はあったけど、本当にやってんのか

男２ 照れるな

男１ 褒めてないからな

男２ 何だよ、褒め称えろよ

男１ バカ言うな。詐欺だろ。バカじゃないの

男２ これは副業みたいなもんだよ。これでもちゃんと仕事してんだぞ

男１ 何の仕事？

男２ これだよ。訪問販売

男１ 何かそれもまた胡散臭いな

男２ 胡散臭くねぇよ。まっとうな商売だぞ

男１ その鞄に何が入ってんの？

男２ これはパンフだけ。見るか？

男１ 主に何扱ってんの？

男２ 色々あるよ。おばあちゃんに布団売ったり、おじいちゃんに壺売ったり

男１ 詐欺じゃん、それ

男２ 詐欺じゃねえよ。向こうが「これ買います」って言うから売ってるだけだろ

男１ まっとうな商品じゃないんだろ

男２ まっとうだよ。普通の商品だよ

男１ じゃあその布団一組でいくら？

男２ 高級羽毛布団一組。二十万

男１ 高いだろ

男２ いいんだよ。それでも買うって言ってんだから

男１ そうやって言わせてるんだろ

男２ そこが腕の見せ所だろう

男１ やっぱり詐欺じゃん

男２ 年寄りは年金が余ってんだよ。自分が死ぬ時の布団くらい自分で買わせてやれよ

男１ お前ひどいこと言うなぁ

男２ そうだ、お前も何か買うか？

男１ いらない

男２ バナナなんかどうだ？

男１ バナナ？

男２ フィリピンで新しく開発したすごいバナナ。商品名「マジカルバナナ」

男１ パクリじゃん

男２ お前バナナパワーを知らないな。これは栄養価が従来の五倍だ

男１ それでいくら？

男２ 一本千円

男１ 高いだろ

男２ 五倍だぞ。これを食べれば一日元気。千円でもギリギリの値段なのに

男１ じゃあお前が買えよ

男２ いらない。あ、栄養ドリンクなんかどう？これはすごいよ。絶倫間違いなし。もう一晩三回は余裕。次の日の仕事も元気バリバリ。夫婦円満。明るい家族計画

男１ まだ独身なので

男２ だったら尚更。彼女の不満を一発解消。商品名「ゴーゴーヘブン」一本二千円

男１ 高いよ

男２ よし、お前には特別に一ダース三万円でご奉仕

男１ 値段上がってるじゃねぇか

男２ これ飲んで彼女に奉仕してもらえよ

男１ お前さあ

男２ 何？

男１ 疲れない？

男２ うん、ちょっと疲れた

男１ 久々に会ったんだしさ、もっと普通の話しないか？

男２ そうだな

男１ しかし、本当に久しぶりだな。いつ以来だ？

男２ ん？　そうだな。高校卒業して、成人式ぐらいじゃないか？

男１ ああ、もうそんなに前か

男２ 今じゃお互い社会人

男１ 詐欺師と一緒にするなよ

男２ いいだろ一緒で。そうだ、お前は何やってんの？

男１ ん？　仕事？

男２ そう

男１ 小林出版って知ってる？

男２ 小林出版って、あれ？　めちゃめちゃでかいじゃん

男１ 業界大手。編集部にいるんだ

男２ へぇー、すごいなお前

男１ まだ下っ端だけどな

男２ そりゃ最初はそうだろ。でもあれか、夢が叶ったってやつか

男１ まあ、そんなとこ。昔からそっち系目指してたから

男２ やるねえ。大成功じゃん。ああ、そりゃ一緒にしちゃ悪いな

男１ まだまだこれからだよ

男２ あれ？　でも出版社って東京にあるんじゃないの？　何でこっちにいるの？

男１ ああ、取引先がたまたまこっちにあってさ。それで

男２ あれか、出張か。出張ってヤツか

男１ まあ、そんな感じ

男２ 格好良いな、出張。俺もやってみたい

男１ お前のはそういうのじゃないだろ

男２ そうなんだよ。ないんだよ、出張。残念だ

男１ その前にお前はもうちょっとまともな仕事をしろ

男２ それは日々思ってますよ。いつまでもこんなことしてられないしな

男１ お前らしいけどな。その場しのぎな感じが

男２ 営業は楽しいんだよ。喋ってるのは性に合ってるし

男１ だな。昔からそうだもんな

男２ 大切なのは演技力です

男１ 出た。演劇部って感じ

男２ 懐かしいな、演劇部って

男１ バカなことばっかりしてたよな

男２ そうそう。体育館取り壊す時あったろ

男１ うん、あった

男２ それでさ、壊す直前に夜中に体育館に忍び込んで

男１ あー、酒持ち込んで

男２ 宴会

男１ 凄かったな

男２ な。跳び箱にウォッカ染み込ませて火つけて跳んだもんな

男１ 滅茶苦茶やったよな

男２ うん。やりたい放題だった

男１ バカな芝居もやったしな

男２ あれか。「怪盗エックス対明知光秀」

男１ 根本的に間違ってるよな

男２ 誰だっけ？　小五郎と間違って光秀って言ったの

男１ 大竹じゃないの？

男２ ああ、そっか

男１ 大体、明智小五郎だったら怪人二十面相だろ

男２ それは怪盗エックスがいいって遠山ショウジがずっと言い張ってたんだ

男１ ああ、そうだったな

男２ んで、もうそのままでいいから戦国時代にしようってことになって

男１ 「出たな！　怪盗エックス！」

男２ 「ハッハッハ。明智君、私に勝てるかな？」

男１ 時代設定滅茶苦茶だもんな

男２ いねえっつうの。安土桃山時代に怪盗エックスはよお

男１ それで、最終的に二人で手を組んで信長倒しに行くんだよな

男２ そうそう。本能寺に突撃するんだよ

男１ ショウジがずっと怪盗エックスの役やりたいって言ってたのに、結局信長役で

男２ かわいそうだよな、あいつ。だからちょっとおもしろくしてやろうと思って

男１ 本番直前に二人で打ち合わせしてさ

男２ 信長が最後の台詞言い終わる前に殺しちゃったんだよな

男１ かわいそうなことしたな

男２ そしたらさ、「まだ俺の台詞終わってねぇだろ」って

男１ 本番中に言いやがったからな

男２ バカかあいつは

男１ あいつはバカだ

男２ 問答無用でどつきまわしたからな

男１ 懐かしいなぁ

男２ そうだな

男１ バカだったよなあ

男２ ああ、バカだった

男１ でも、お前は今でもバカのままだな

男２ バカにするな。これでも昔より利口になったぞ

男１ そういう意味じゃないよ

男２ 人を騙すのは上手くなったぞ

男１ それもどうかと思う

男２ まあ、分かってるんだよ。昔みたいにただバカなことしてりゃ幸せだってこともないし、かと言って今更真面目に地道に働くってのもな。お前が羨ましいよ

男１ 羨ましい？　僕はお前はが羨ましいよ

男２ は？　何が？

男１ そうやって、バカなことやって、好きなように生きてるとこ

男２ 褒められた気がしないな

男１ 詐欺はダメだけどな

男２ 詐欺はもうやめる。この仕事もやめる

男１ やめてどうすんの？

男２ ちょっと遠くに行こうと思って

男１ 遠く？　どこ？

男２ アフリカ

男１ アフリカ？　それはちょっとどころじゃないぞ

男２ ちょっとどころじゃないよ

男１ 何しに行くの？

男２ ボランティア。知り合いの紹介でさ。食べるものがないアフリカの子供にご飯食べさせてあげたり、服とか遊ぶ道具あげたり、家作ったり、勉強教えたり。仕事って言えるのかどうか分からないけど、最低限の生活はできるらしいし、まぁ、そういうのもやってみたらおもしろいかなって。おもしろ半分で行っちゃいけないんだろうけどな。言葉だって全然分かんないしさ。でも、何か、やってみようって思ったんだ

男１ すごいな、お前

男２ すごくなんかないよ。多分俺なんか足手まといだよ。逆に迷惑かけるんじゃないかな

男１ それでもさ、それってすごいと思うぞ

男２ そうか？

男１ うん。がんばれよ。いつから行くの？

男２ お前って本当に騙されやすいな

男１ え？

男２ アフリカだぞ。行くと思うか？

男１ 行かないのか

男２ だって俺全然ボランティアって柄じゃないもん

男１ 今のちょっといい話は何だったんだよ

男２ 感動したろ

男１ 死んでしまえ

男２ やなこった。騙される方が悪いんだよ

男１ お前の話はどこまで本当か全然分かんないな

男２ どこまで本気か分からないっていうのをモットーに生きてます

男１ 自分だけが騙す方だと思うなよ

男２ 何それ？

男１ 僕はさっき嘘を吐いた

男２ 嘘？

男１ 小林出版

男２ それがどうした？

男１ 落ちたよ

男２ 落ちた？

男１ 落ちたんだよ、就職試験で。第一志望だったけど。今は小さい出版社で雑誌の編集の仕事してる。編集って言っても雑用とかそういうの含めて全部だけど

男２ 嘘？　お前が？

男１ 何？

男２、突然笑い出す。

男１ どうした？

男２ お前、詐欺師になれるよ

男１ 何だそれ

男２ いいじゃねぇか別に。お前がその会社でっかくしてやれよ。夢への第一歩だろ？

男１ お前の言うことって嘘臭いのに、何か信じたくなるんだよな

男２ 雑誌の編集か。じゃあ俺のアフリカ体験記、記事にしてくれよ

男１ 本当に行くならな

男２ よし、メシ食いに行こうぜ。時間大丈夫か？

男１ ああ、今日はもう終わったから

男２ じゃあこのお前の財布の中の金で好きなだけ食べよう

男１ あ、お前！　いつの間に

男２ ああ、俺スリもできるかもしれない

男１ お前っていうヤツは

男２ いいだろ、送別会がてらおごってくれよ

男１ 送別会？

男２ 来月には向こうに行かなきゃいけないんだ

男１ 向こうって、お前さっき

男２ よし、行くぞ

男１ あ、ちょっと待てよ。おい

二人、走り去る。

終わり。